

---

# 夏草薫る

山元祥子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏草薫る

### 【Nコード】

N5880I

### 【作者名】

山元祥子

### 【あらすじ】

老職格の家に侍女として仕えてきた加代は、縁談がまとまり、奉公を終えることとなった。そんな彼女に町奉行与力の良忠が声をかけ、加代の運命は変わる。全四話の時代小説です。

## 第一話 雨上がる

朝から降っていた細かい雨もやみ、庭の紫陽花が太陽の光を浴びて、鮮やかな色を放っていた。

加代は花の稽古に必要な道具を入れた包みを手に、早苗の部屋へ向かう。

「お嬢さま、お支度のほうはお済みですか」

ええ、と振り向いた早苗は、桔梗色に百合の花をあしらった単衣に身を包んでいた。おっとりとした顔つきに、隠しきれない喜びの笑みが浮かんでいる。

「では、参りましょう」

加代がいい、二人は連れだって通りに出ると、坂下邸へと歩いた。以前は出稽古に来ていた師匠の志保が住まう屋敷で、すでに老齢となった彼女を、今では早苗が加代をお供に訪ねる形となっている。

一町半を過ぎたあたりで、早苗がそわそわとしだし、加代も自然と地面を見る。やがて向こうから月代をそり、黒い紋付きの羽織に両刀を差した袴姿の武士が現れると、早苗は顔を赤らめて立ち止まり、丁寧な辞儀をした。

やはり足を止めて、相手も頭を下げる。町奉行与力の江成良忠で、

勘定方奉行である江成正治の次男だ。

良忠は幼少より学問と剣の双方に優れ、藩主である大和守重久にお側小姓として召し抱えられるまでとなった、評判の人物である。若くして与力にあげられ、重久から命ぜられるまま様々な奉行所を転任していた。武家の次男としては異例の、役料まで与えられている。

(多一郎さま……)

通りの脇へ寄り、加代は深く腰を曲げる。

加代と同じ年である彼は、幼名を多一郎といった。

早苗付きの侍女を探していた鈴木家へ、ちよつとした用事で手伝いに行った際、機転の利くところを気に入られ、奉公することとなった加代は、かつて江成家の上女中であった。

(とても気さくで、お優しい方だった)

元服する前の多一郎であった良忠を良く知る加代にとって、早苗の稽古に付き添い、出仕途中の彼と毎度のように顔を合わせることが、苦痛でもあり、胸躍ることもあった。

(もう二度と、お会いすることもない)

出世頭である彼は、すでに代々家老職を勤める鈴木家に婿入りが

決まっている。加代が仕えている、鈴木隆久の一人娘、早苗と近々祝言をあげるのだ。

複雑な思いを抱いたまま、それでも顔色ひとつ変えない加代の前で、早苗も良忠も、まったく言葉を交わさないまま、すれ違っていた。

（早苗お嬢さまの、引っ込み思案な気質と幼さには、困ったものだ……）

良忠にひとめ会いたいが為だけに、こうして花の稽古へいそいそと通っているというのに、頬に手をあててうつむき、恥ずかしがるばかりだ。そんな早苗に加代は眉をひそめ、次いで立ち去った良忠を肩越しに振り返る。

「加代」

同じくこちらを振り返っていた彼から名前を呼ばれ、加代は飛び上がるほどに驚いた。江成家を出て早苗の侍女となつてから、彼に声をかけられたことなど、一度も無い。

「国元へ帰るそうだな」

はい、と小さく返事をする加代に代わり、早苗が早口でしゃべり出す。

「良い縁談がまとまったのです」

小走りに良忠へ駆け寄り、彼女は耳まで真っ赤にしながら、よう

やく見つけた話題が途切れないよう、懸命であった。

「今までも縁談があつたのに、加代は断り続けておりました。私もふたつ上ですから、もう20です。寂しくなりますが、そろそろ嫁に行かねばならぬ歳です」

話し続ける早苗をさえぎり、

「在所は相良川の向こう、中津村だったな」と、良忠は加代に視線を移し、問いかける。

「はい」

「ご隠居は息災であろうか」

加代の実家である亀原家は領内きつての富豪で、年貢の取りまとめをも請け負っていた。隠居の文右衛門はなかなかの知恵者で、当主の座を加代の父に譲ったのちも広く力を発揮し、郡奉行でさえ何かあれば、必ず彼に相談するほどである。

「健在です。このたびの縁談も、祖父が世話してくれました」

そうか、と良忠が腕を組んで、考え込む様子に、加代は不安を感じた。

「祖父が何か……」

「いや。殿がお忍びで領内を回られた際、大変世話になった」

礼を申すよう頼まれ、うなづく加代を前に、彼はあるかないかの笑みを顔に浮かべる。

「加代は……鈴木家に仕えて何年になる。二年か、三年か」

「四年ですわ。良忠さまのところから、加代が当家に来ましたのは、私が14の時でしたから」

そう告げる早苗は、良忠より格上にあたる家柄の娘でありながら、へりくだった態度で彼に接していた。惚れ込んだ弱みなのか、良忠が許嫁いいなすけとなった今も、甘ったるく、恋する生娘そのままな声を出す。

「そうか。うちを出て、もうそんなになるのか」

良忠が低い声音でいい、加代も感慨深かった。14歳で村を出てから、すでに6年もの歳月が過ぎ去っている。

「本当なら、あなたさまと私の祝言を見届けてもらってから、送り出したかったですけれども」

無邪気な早苗に、良忠はいたわるような、優しい眼差しを落としたり。加代にはそれが、どこか取り繕っているように見える。

「出立はいつになる」

良忠に問われ、目を伏せた加代は、小声で答えた。

「明朝にお屋敷を発ちます」

「明日……ずいぶん急だな」

黙ったまま、加代はいつそう背中を丸める。

「早くに迎えが来るようです。卯の上刻には家を出たいと申しておりますから」

早苗が口を挟んだところで、二人の若侍が通りかかり、良忠に対して丁寧な挨拶をした。それを機に話は打ち切られ、良忠は通り一遍の挨拶を済ますと歩き出し、路地を曲がっていった。

早苗も加代を伴い、先を急ぎながら、

「今日は良忠さまと、たくさんお話ができました。加代のお蔭です」と、頬を紅潮させたまま、浮かれている。

「いずれ毎日のように顔を合わせ、話をするようになりますよ」

加代の適当な相づちを聞いても、早苗は袂で口元を覆い、初々しく笑っていた。目をそばめ、加代は道の両側に立ち並ぶ組屋敷に顔を向ける。

そこかしこに咲いている可憐な卯の花が、目に痛いほど白く、ぼやけて見えた。

## 第二話 梅雨の晴れ間

中津村から、加代より三つ年上である兄の加平が、鈴木の家敷まで彼女を迎えに来た、その日は、梅雨の雨季には珍しく、朝からよく晴れていた。

二人は揃って鈴木家を後にすると、武家屋敷を抜け、にぎやかな商家の立ち並ぶ通りを歩いた。やがて寺町に入り、道は雑木林の中へと続いていく。

加代は林の中の緩やかな下り坂を歩きながら、兄から結婚相手について、色々と聞かされた。

「半田村宮大工の棟梁、長野徳右衛門家次の長男で、名を莊吉という。26になる、宮大工としての腕も立つと評判の男だ」

連日の雨でぬかるんでいる道を注意深く進む加代は、黙ってうなずく。

じいさまの隠居所も彼が手がけた、と説明されたところで思い出し、兄にたずねた。

「中津村の隠居所へ、大和守さまが、お忍びでお寄りになったとか」「殿さまが？ じいさまの隠居所へ？」

そんな馬鹿な、と笑い出す加平に、

「江成さまが、そうおっしゃっていました」

と、加代が付け加え、ようやく兄も思い至ったようであった。

「以前、加代が奉公していた江成家の、良忠さまのことか」

「ええ」

「確かに隠居所へ参られたことがあった。昨年春、大和守さまが江戸からご帰国された折のことだ」

そうか覚えているぞ、と興奮した口ぶりになって、加平は語り出した。

「思えば妙な身なりだった。筒袖の百姓じみた格好をした、あれが……。江成さまとお二人で、じいさまを前に水路の話を、熱心にしていらした」

実はな、と兄が声をひそめ、加代もいつそう耳を傾ける。

「近いうちに小屋が建てられ、人足や道具も集められる。相良川から水を引く、かなり大きな工事が始まるのだ。藩をあげての大事業になるだろう」

中津村はたびたび洪水に襲われ、水田が砂に埋もれていた。復興させるには、かなりの難工事となるが、成功すれば3万坪もの荒地が水田となる。

（江戸へ行かれた際、堤防と用水路の新しい工事を、多一郎さまは学んでいらつしやった）

思わず足を止める加代に気付き、

「どうした、加代」  
と、加平が訊いた時、遠くで馬の駆ける音がした。ひづめが激しく地を蹴り、近づいてくるのを察すると、二人は慌てて林の中に足を踏み入れ、道を空ける。

たちまち現れた見事な馬が、目の前でいななき、動きを止めたかと思うと、乗っていた武士が、飛び降りて来た。

常着に袴を着け、脇差だけを腰にした、何者かわからぬ風体である。

彼はすぐさま加代に目を留め、  
「なるほど。これは器量良しだな」  
と、馬の手綱を持ったまま、白い歯を見せた。

続いて小姓なのか、やはり馬に乗った武士がふたり、姿を見せ、そのうちの一人が良忠と気づくや否や、加代は地面に膝をつき、平伏した。与力である彼が、火急の用に馬を駆つてまで、伴ともをする人物など、容易に想像がつく。

ほう、と最初に馬を降りた男は、加代の頭上で面白そうにいった。

「おまえは、おれが何者かわかっているのか」

「はい。御城主の大和守重久さまにございましょう」

彼女が答えた途端、後ろで何事かと見守っていた兄も、地面に両

手をつき、頭を擦りつけた。

「良忠っ、この者に違いないな！」

大声で笑いながらいう藩主に追い付いた良忠が、馬を下り、駆け寄って来る。

「おまえがいったとおり、賢い娘のようだ。あとのことは、頼んだぞ」

「それでは……」

「良い！ 気に入った！」

たったそれだけを良忠へいい残し、重久は再び馬に乗ると、手綱を鳴らした。上り坂を苦ともせず、疾駆する馬を、良忠と連れだつて来た、もう一人の別の小姓が追いかける。

残された加代は立ち上がり、去りゆく二頭の馬を見送った。

「これは、一体どういことですか」

ふらふらと立ち上がった加平が、戸惑いも露わに良忠へ問いかけ、加代も馬の首を撫でる彼に顔を向ける。

加代は、といいかけ、加代どの、といひ直した良忠は、

「城中へ召し上げられます」

と、加平へ振り返り、告げた。

「追って城より沙汰があると思いますが、彼女は今から、本多さま

の家にお預けとなります」

「それは、まさか……」

顔色を変えた加平へうなずいてみせる良忠の口から、

「殿の御側室となられるのです」

と、言葉が発せられ、加代は目を伏せた。

(私は重久さまの側女となるのだ)

彼女が預けられる先は、城代家老を勤める本多和正が当主である、本多家なのだろう。恐らく加代はその養女となり、身分を整えたうえで、御殿にあがるのだ。

「加代殿の連れには、急ぎ中津村の亀原家へ知らせて欲しい」

重々しい口調に圧倒されたのか、加平はただおろおろするばかりである。

兄さま、と加代はりんとした声でいった。

「父さまと母さまに、よろしくお伝え下さい。おじいさまにも、せつかくの縁談を断らねばならないことを、深く詫びて下さい」

加代、と彼女の名を呼び、兄は目に涙を浮かべた。

「わかった。これが今生の別れとなるのかもしれないのだな」

「兄さま」

加代と加平は互いの両手をとり合った。

どうか達者で、といい、涙を拭う加平に、

「くれぐれも内密に願いたい。亀原家の者以外に、口外は一切ならぬ」

と、いう良忠の声は苦しげで、表情にも二人を憐れむ様子が見えてとれた。

「荷物はどうしましょう」

肩越しに背中を見る加平へ、

「持ち帰るがいい。加代どのは、身ひとつで向かわれる」と、良忠はただちに答えた。

「それでは、くれぐれも加代のことを、よろしくお願いします」

深く腰を曲げる加平に、良忠も深く首を縦に振り、応じてみせる。そうして彼は、加代の視界から兄の姿が消えてなくなるまで、何もいわず、その場に留まり続けた。

雨が木々の葉を叩き始め、加代は空を見上げる。あんなに青かった空が、いつの間にか厚い雲に覆われていた。

馬の手綱を手近な木の幹へとくくり付け、良忠は加代の手を引く。

二人は大きなケヤキの下で、しばし雨をしのいだ。

「許してくれ」

長い沈黙のあと、不意に良忠が口を開いた。

「私は加代を、出世の道具にした」

泥に汚れた着物の裾へ、加代は視線を落とす。

「鈴木家が一人娘のために、侍女を探していたことは知っていた。加代をそれとなく鈴木の家に通りさせ、侍女として上がらせたばかりか、それをきっかけに私は早苗どのと親しくなった」

いわば婿入りの話を引き寄せたのだ、と良忠は自嘲気味に語った。

「側室の話も同じだ。江戸にいらっしやる殿の御正室つる姫さまは、ご病弱で、結婚して五年になるが、未だ子ができない。殿は跡継ぎが欲しいと焦っておられる。だったらと、加代を推したのは、この私だ」

雨はまもなく弱まったが、道には細い水の流れが幾筋も出来ていた。良忠と並び、木の下に立っていた加代は、それを見ながらいった。

「中津村で、相良川の堤防と水路の工事が始まるそうですね」

夢のよう、とつぶやき、良忠を見上げる。

「多くの民百姓たみが救われることでしょう」

「相良川の治水は藩の急務だ。中津村の工事は、ほんの手始めにか過ぎない」

彼の返事は冷たく、突き放すようなものだったが、加代にはわかっていた。

部屋住みの私には、彼らのつらい気持ちがよくわかる。田畑のない者に、何とか開墾する土地を、分け与えたい。そのためにも、加代がいった中津村の荒地を、何としてもよみがえらせたい。

若き日の良忠がいった言葉を、今でも覚えている。

良忠さま、あなたは決して加代を出世の道具になど、していません。

加代は胸の奥で、そう彼に語りかけながら、あの夏祭りの日のことを思い出していた。

### 第三話 夏祭り

武家の内情というものは、外から見るとは、はるかに大変だった。家の格式に見合う数だけの家士や下男下女を雇わねばならず、家計は火の車が常である。

加代は江成家の苦しい事情を知り、奥の仕事だけでなく、炊事や雑事まで厭うことなく、こなした。富農の娘とはいえ、百姓の子である彼女にとって、体を動かすことは性に合っていたし、下働きも別段、苦にならなかったからだ。

加代が仕えている江成家の奥方である貞は、そんな彼女を気に入って、夏祭りの日、外へ出してくれた。つまりは用事が済んだら少し遊んできてもいいよ、ということだ。

いい付けられたとおり、さほど遠くない家に頼まれた包みを送り届けた加代が、祭りを見に行こうとして、多一郎と出くわしたのは、武家屋敷の間を抜け、町人町へ出ようとした時だった。

夏祭りへ行くのか？

普段なら言葉を交わすことさえない、彼からの問いかけに戸惑いながらも、加代は首を縦に振った。すると多一郎は、一緒に行こうと、いつてきた。

祭りには多くの者が繰り出し、気性の荒い者達も中にはいる。迷ったり、いざこざに巻き込まれてはいけないというのが、彼のいい分であった。

当然のことながら、加代は尻込みをした。

彼女が仕える江成家には二人の息子がおり、長男の忠義は与力見習いとして出仕し、近く婚儀が控えている。

次男の多一郎は、藩校である信道館を一番の成績で卒業し、若干15歳で家督を継いだばかりの藩主、大和守重久によって、側小姓に召し上げられていた。

重久は古い藩体制を一新しようと、身分に関係なく、優秀なものを御小姓に取り立てていた。実際、あげられた者の中には、江戸詰めの家の冷や飯食いや、平侍である徒士組の子息などもいた。

その中であつて、多一郎は特に藩主の気に入るところとなつていく。お忍びで重久が領内を回つた際、お付きの者は多一郎ひとりであつたと、とかく噂になつていく。

近く重久の命で、城代家老の本多和正が剃刀親となり、元服することや、若くして郡奉行付きの与力にあげられることまで決まっている。

このように異例の出世をとげた多一郎だが、役目の合間に方々を歩き回っては、屋敷で実地踏査の帳面をつけ、難しい書物と読み比べている。

同い年だというのに、慢心することなく、勤めに励む多一郎を、加代は秘かに恐れ、敬っていた。あまりにもまぶしい存在である彼と、まともに話をするこゝとすらできない。

そんな加代の心中など気付きもしないのか、多一郎は返事も聞かずに歩き出し、彼女もおおずおと従うしかなかった。

祭りが行われている神社の参道にたどり着くと、あまりの賑わいに、加代は度肝を抜かれた。多くの露天商や大道芸人、見せ物小屋の、派手な口上が飛び交っている。

それでもお囃子の調子に合わせて、自然と心が浮き立った。

山家育ちの加代には、何もかもが物珍しく、あれは何でしょう、これは何でしょう、とついつい言葉が口を突いて出る。

多一郎は丁寧の説明してくれたばかりか、ともすれば往来する人や荷車へぶつかりそうになる加代の肩に、そつと手を触れ、助けて

もくれた。

気持ちがほぐれ、楽しい時間はあっという間に過ぎていく。

そろそろ屋敷に戻る刻限かと思われた頃、加代は物売りに声をかけられた。

朱に塗られた飾り櫛を見せられ、お似合いですよ、と勧められる。ぼうつと見惚れる彼女の後ろで、多一郎までもが袂に手を入れ、櫛を興味深げに眺めていた。

彼が何かいおうとして、口を開きかけると、加代は慌ててその場を離れ、二人はそのまま屋敷に帰った。

夏祭りの日を境に打ち解けた加代と多一郎は、顔を合わせると、必ず話をするようになった。

洪水に襲われた中津村の、砂に埋もれた悲惨な田畑の様子や、日々の食べ物にまで困る貧農達について、加代が語り、多一郎も真面目に耳を傾けてくれた。

奥方の貞が、当主の正治に、加代と多一郎について、話をしているのを聞いたのは、それから半年ほどしてからのことである。

多一郎は無事、元服の式を済ませ、良忠と名を改めていた。

勤めから戻り、着替えをしている正治の着替えを、貞が手伝っている居室の横を、たまたま加代は通りかかった。

良忠と加代の間に、何か間違いがあっではいけません。

計らずも耳にしてしまった奥方の言葉に、加代は心臓が止まる思いだった。急いで座敷を離れ、台所へ行くと、土間に下りて、何度も深呼吸をした。

それから幾日もしない内に、出府して江戸に渡る内定が、良忠へと下された。偉い学者の元で、堤防と用水路について学ぶためと伝え聞いた加代も、間もなく鈴木家の茶会へ手伝いに出され、彼が江戸へ詰めている間に、江成家を離れることが決まった。

家老鈴木隆久の一人娘早苗の侍女となった加代が、再び良忠に会い見えるまで、3年の歳月が流れた。

花の稽古へ行く早苗の伴をしていた道中、江戸から戻り、郡奉行与力を経て、町奉行与力となった良忠と、偶然鉢合わせたのだ。

お互い押し黙ったまま会釈のみを交わし、通り過ぎたが、江成家

御次男の良忠さまだと、加代から聞かされた早苗は、すっかり彼ののぼせ上がってしまった。花の稽古へ通う際、良忠の出仕する時間を見計らって、屋敷を出るようになったのだ。

城主の信頼厚く、剃刀親は城代家老の本多さまで、頭もずば抜けて良い。良忠は将来性のある、立派な若者に育っていた。

早苗の父である隆久は、良忠を娘の婿にと、がぜん乗り気になった。良忠の父、江成正治を屋敷へ呼びつけ、ただちに二人の結婚が決まったのだ。

加代にも中津村から、何度目かとなる縁談が、持ち込まれた。もう断る理由のなくなった彼女は、素直にその話を受けた。

## 最終話 赤い櫛

雨が上がったのを見てとり、良忠は馬のくつわを取ると、手綱を  
持った。

「加代、そろそろ参ろうか」

懐かしい打ち解けた口調になって彼がいい、加代は首を縦に振る。  
体に手を添えられて、鞍の上へ上がり、横座りになった。

彼女を抱きかかえるように、良忠も馬にまたがる。

走り出す馬の背に揺られながら、加代は振り落とされないよう、  
彼の胸にすがった。

「加代は、良忠さまが好きです」

地を駆けるひづめの音が、辺り一帯に響き渡っていた。何をいつ  
ても、決して彼の耳には届かないだろう。わかっていたからこそ、  
彼女は告げることができた。

馬はたちまち坂を登り切り、寺町に入る。

たくさん葉が生い茂る、大きな木が道の両側をふさぐ、人気の  
ない辻で、良忠は突如、手綱を絞り、馬を止めた。

「加代」

名前を呼ばれ、彼の小袖から顔をはがした加代は、良忠を仰いだ。

「おまえのことを話したのが、私の迂闊であつた。殿は悪知恵が働くうえ、目ざとく、大変に賢いお方だ」

良忠は何かのきっかけで、彼女のことを、ふと重久に洩らしてしまつたのだろう。

「加代のため、私はいつそう身を粉にして、殿にお仕えすることになるだろう」

加代の言葉に対する、偽らぬ返事だつた。良忠の羽織を、知らず知らず彼女は、きつく握り締める。

若くして藩主となつた重久にとって、忠義に疑いのない側近を持つことは、重要な意味を持つ。古い藩政にしがみつく歴々の家臣達は、ことあるごとに改革を邪魔するからだ。

疑念を抱くことなく使える者が必要な重久は、あらゆる手だてを用いて、自分の手足となる新しい家来を育てている。

加代を側室にしようとしたのは、良忠の気持ちを即座に見抜いたからだ。彼女を召し上げることで、自分を裏切ることはないよう、良忠に足かせをはめたのだ。

加代は胸がいつぱいになった。

中津村の大工事は、恐らく藩政改革への第一歩なのだろう。あま  
りにも難しいと反対してきた勢力を押し切って、断行することにな  
るからだ。

（そして良忠さまが、きつと工事の指揮をとられる）

家老の家柄に婿入りすることで、立場も揺るぎないものになるだ  
ろう。

良忠ならきつと、加代が願う立派な藩の御重臣となり、領内の人  
々を幸せにできると、彼女は信じていた。

良忠さま、と彼の瞳を真っ直ぐに見つめる。

「加代はきつと、立派な男子を産んでみせます」

はつきりと口にして、体が震えた。

江成家を出され、早苗の侍女となったのも、藩主大和守重久の側  
室となるのも、良忠と加代の間には芽生えた、ある想いがあってこそ  
のことだ。

良忠は合わせた襟の間から、赤い塗櫛を取り出すと、涙をこらえる加代の髪に差した。代わりに元から差してあった彼女の櫛を、襟裏に収め、手綱をつかむ。

威勢良く馬が走り始め、二人は間もなく本多和正の屋敷に着いた。

家士が良忠と加代を出迎え、

「主がお待ちです」

と、上がるよう勧めたが、彼は断った。

「急ぎ殿の元へ参らねばなりません」

加代どのをよろしく頼みます、と頭を下げ、再び馬上の人となった良忠は、黙って加代にうなずいてみせた。そして深々とお辞儀をする彼女から顔を背け、前を向いたかと思うと、馬を走らせ、もう二度と振り返らなかつた。

家士は身分ある人物へするように、加代を案内した。

大身の屋敷へ玄関から入ることに臆した彼女だったが、思い直し、背筋を伸ばす。

式台には本多家の奥方である晴がいて、泥だらけの加代を認めると、下女にたらいを持ってこさせ、水を張らせた。

玄関で足を洗いながら、加代は着物の裾についていた草を見つけ、指でつまみ上げる。

雨に濡れ、青々とした葉からは、みずみずしい夏の香りがした。その匂いで胸を満たすと、草をたらいの水に浮かべた。

下女によって足を綺麗に拭われ、屋敷へあがる。

加代が歩く板敷きの間に差し込む、外からのまばゆい光が、彼女の髪に差さる赤い櫛を煌々と照らした。

水の上を漂っていた草は、そっと底に沈んでゆく。振り返る者は、誰もいなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5880i/>

---

夏草薫る

2010年10月10日01時08分発行